

主 題：ほふられる羊とみなされたとしても

聖書箇所：詩篇 44篇

テーマ：忠実に歩もうとする者が理解できない苦しみを味わう時はどうすれば良いのか？

今朝、見ていきたいのは詩篇44篇のみことばです。前回、詩篇42-43篇を学んでから、ほぼ一年がたちました。このペースでは、最後までどれくらいかかるのか考えられませんが、一つずつゆっくり一緒に考えていきましょう。

#### 詩篇44

「:1 神よ。私たちはこの耳で、先祖たちが語ってくれたことを聞きました。あなたが昔、彼らの時代になされたみわざを。:2 あなたは御手をもって、国々を追い払い、そこに彼らを植え、国民にわざわいを与え、そこに彼らを送り込まれました。:3 彼らは、自分の剣によって地を得たのでもなく、自分の腕が彼らを救ったのでもありません。ただあなたの右の手、あなたの腕、あなたの御顔の光が、そうしたのです。あなたが彼らを愛されたからです。:4 神よ。あなたこそ私の王です。ヤコブの勝利を命じてください。:5 あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。:6 私は私の弓にたよりません。私の剣も私を救いません。:7 しかしあなたは、敵から私たちを救い、私たちを憎む者らはずかしめなさいました。:8 私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。:9 それなのに、あなたは私たちを拒み、卑しめました。あなたはもはや、私たちの軍勢とともに出陣なさいません。:10 あなたは私たちを敵から退かせ、私たちを憎む者らは思うままにかすめ奪いました。:11 あなたは私たちを食用の羊のようにし、国々の中に私たちを散らされました。:12 あなたはご自分の民を安値で売り、その代価で何の得もなさいませんでした。:13 あなたは私たちを、隣人のそしりとし、回りの者のあざけりとし、笑いぐさとされます。:14 あなたは私たちを国々の中で物笑いの種とし、民の中で笑い者とされるのです。:15 私の前には、一日中、はずかしめがあって、私の顔の恥が私をおおってしまいました。:16 それはそしる者とのしる者の声のため、敵と復讐者のためでした。:17 これらのことすべてが私たちを襲いました。しかし私たちはあなたを忘れませんでした。また、あなたの契約を無にしませんでした。:18 私たちの心はたじろがず、私たちの歩みはあなたの道からそれませんでした。:19 しかも、あなたはジャッカルに住む所で私たちを砕き、死の陰で私たちをおおわれたのです。:20 もし、私たちが私たちの神の名を忘れ、ほかの神に私たちの手を差し伸ばしたなら、:21 神はこれを探り出されないのでしょうか。神は心の秘密を知っておられるからです。:22 だが、あなたのために、私たちは一日中、殺されています。私たちは、ほふられる羊とみなされています。:23 起きてください。主よ。なぜ眠っておられるのですか。目をさましてください。いつまでも拒まないでください。:24 なぜ御顔をお隠しになるのですか。私たちの悩みとしいたげをお忘れになるのですか。:25 私たちのたましいはちに伏し、私たちの腹は地にへばりついています。:26 立ち上がって私たちをお助けください。あなたの恵みのために私たちを贖い出してください。」

かつて、ヨブという名のひとりの信仰者がいました。神様のことを心から愛して、いつも神様の前を忠実に歩もうとしていた人物でした。みことばもそんな彼の姿をこのように表現しています。ヨブ1:1に「ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」と書かれていました。ヨブは潔白で正しい者でした。そして、そのような歩みをしていたヨブのことを神様も愛され、ヨブに多くの祝福を与えられました。物語の始まりは、すべてが順調に思えたのです。しかし、ご存じのとおり、ある日、すべてが一変することになりました。潔白で正しく、神様を恐れていたヨブの身に大きな苦難が降りかかったのです。もちろん今の私たちは、みことばを通してその苦難が神

様とサタンの間でなされた天でのやり取りが原因だったことを知っています。でも当然ヨブは、そんな理由など知る由もありません。彼自身は、変わらずに忠実に歩んでいました。にもかかわらず彼は、子どもや富をすべて失い、ひどい病気で苦しむことになったのです。間違いなく彼は深い悲しみを抱いただけでなく、ひどい混乱を覚えたでしょう。突然降りかかってきた自分の状況を理解できなかったでしょう。罪から離れて、忠実に歩み続けていた自分の上に、いったいどうしてこのようなひどい困難や苦しみが降りかかってきたのだろうか、なぜ自分が愛している神様は、自分をこのような目に遭わせられるのだろうか、こんな疑問や疑いを覚えたとしても何ら不思議ではなかったでしょう。また確かに、ヨブ記を読み進めていけば、彼自身のうちにも弱さや愚かさは存在していましたが、それでもなおヨブは、変わらずに神様に信頼しようとしていました。自分には到底理解できないような苦しみの中で、彼は神様への強い確信を繰り返して口にしていたのです。例えばヨブ13:15-16に「見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、……神もまた、私の救いとなってくださる。」と書いてありました。たとえ子どもを失ったとしても、たとえ全財産や健康を失ったとしても、たとえ目の前で起こっている出来事の意味が全く理解できないままに神様が自分を殺したとしても、それでも変わらずに神様を待ち望むことが、ヨブの持っていた愛する神様に対する揺るがぬ信頼でした。

果たして今私たちは、彼のようにどんな時も神様に変わらず信頼しようとして歩んでいるのでしょうか？自分の身に起こっていることが理解できずに、混乱を覚えてしまうような時も、苦しんでいる理由が自分には全くわからない時にも、神様を忠実に待ち望んでいるのでしょうか？きょう、私たちが学んでいく詩篇44篇を読んだ時に、気づかれたかもしれませんが、ここに描かれていたイスラエルの民たちは苦しみを覚えていました。何らかの戦いに敗れて、大きな痛みや悲しみの中に置かれていました。具体的にどんな戦いだったか、いつの時代の話なのか、残念ながらよくわかっていません。少なくとも、彼らはこの時ひどい苦痛を味わい、切実に助けを必要としていたのです。ヨブと同じように、彼らも忠実に神様の前を歩もうとしていました。神様に喜ばれることをなそうとしていました。それでもなお、神様が自分たちの声に向いて耳を傾けられないことに彼らは混乱を覚えていたのです。だからこそ、こんなことばも詩篇の中に出てきていました。23節に「起きてください。主よ。なぜ眠っておられるのですか。目をさましてください。いつまでも拒まないでください。」と。イスラエルの民たちも神様が遠く離れたかのように感じていました。彼らもまさに自分たちが理解できないような苦しみの中に置かれていました。どうして愛する神様が自分たちをこのような目に遭わせられるのだろうか、そんな疑問を抱いてもおかしくない厳しい状況にあったのです。そんな中でもなお、彼らも神様の前を忠実に歩み続けようとしていました。正しい態度を、正しい応答を示し続けていたのです。

いったいどうして彼らにはそんな歩みができるのでしょうか？自分自身が忠実に歩いていく中であって、突然理解のできない苦しみが降りかかってきた時、彼らはどうして変わらずに神様に信頼して歩み続けられたのでしょうか？その答えをきょうはみことばを通して一緒に学びたいと思います。そして、ぜひ自分自身のこととして考えてみてください。私たちも忠実に歩み続けようとする時に、私たちには理解もできないような問題が降りかかってくることがあります。なぜこんなことが起こっているのだろうか、私たちが疑問を抱きたくなるような問題も降りかかってくることがあります。神様が何をなされているのか、私たちにはわからないような場面に置かれることもあります。でも、そのような場面に置かれた時に、私たちは果たしてどのように応答することができるのでしょうか？私たちはこの詩篇44篇の中に、実際にイスラエルの民が取っていた三つの行動を見ることができます。苦しみの中で、彼らはどのように応答していたのか、三つのことを順番に考えてみましょう。

**○理解できない苦しみを味わう時には：**

1. 過去のみわざを思い起こすこと 1-8節

苦しみを味わっていた民が一つ目にとっていた行動は、過去のみわざを思い起こすことでした。1-2節はこんなふうにあります。「:1 神よ。私たちはこの耳で、先祖たちが語ってくれたことを聞きました。あなたが昔、彼らの時代になされたみわざを。:2 あなたは御手をもって、国々を追い払い、そこに彼らを植え、国民にわざわいを与え、そこに彼らを送り込まれました。」と。イスラエルの民は、先祖が以前自分たちに語ってくれたこと、はるか昔、神様がなされたみわざに思いをめぐらせていました。どのようなみわざに思いをめぐらせていたのか、それは具体的には書いていませんが、私たちは容易に想像することができます。かつてエジプトで奴隷として苦しんでいたその民を、神様が救い出してくださったこと。かつて神様がパロの軍勢に追われて絶体絶命になっていたその民に紅海を渡らせて、守ってくださったこと。かつて神様が約束の地へと導いてくださっただけでなく、そこにいた数々の敵を追い払ってくださり、その土地に民を住まわせてくださったこと。ほかにも挙げれば切りがありません。イスラエルの民たちは、ここで自分たちが耳にしてきた過去の出来事、神様がこれまでになされたすばらしいみわざを思い出していました。人々の間で、代々語り継がれてきた歴史に心を留めていたのです。

でも彼らは神様がなされたすばらしいことに思いをめぐらせていただけでなく、そのみわざが神様によって成し遂げられたものであることにも気づいていました。3節を見てみると、「:3 彼らは、自分の剣によって地を得たのでもなく、自分の腕が彼らを救ったのでもありません。ただあなたの右の手、あなたの腕、あなたの御顔の光が、そうしたのです。あなたが彼らをお愛されたからです。」と続いていました。何回も「あなた」ということばが繰り返されていました。彼らが約束の土地を手にするのができたのは、彼らが約束の地で敵との戦いに勝利することができたのは、彼ら自身の力や努力ではなかったことをイスラエルの民はわかっていました。彼ら自身が勝ち取ったものでもないことを正しく覚えていたのです。特に、3節の終わりに「あなたの御顔の光が、そうしたのです」という表現が使われていました。

#### ▶「御顔の光」

このことばは聖書の中で、神様の恵みや喜びを表わすのに用いられます。例えば民数記6:25に「:25 主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。」と記されています。言われていることは同じでした。約束の土地を手にするのができたのは、ただ神様の恵みのゆえでした。戦いに勝利することができたのは、ただ神様の愛のゆえでした。それ以上でもそれ以下でもなかったのです。彼らはそれが自分自身の力でなされたのではないことをわかっていました。ほかの聖書箇所にもこのようなことばが記されています。申命記7:1に、イスラエルが約束の地に入って行く様子が「:1 あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、主が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。」と書かれています。イスラエルの民は約束の地へ入って行こうとしましたが、彼らを待ち構えていた敵たちは、彼らよりもはるかに大きな存在でした。七つの民はイスラエルよりもはるかに数も多く、力強い存在であったがゆえに、彼ら自身には手に負えないものでした。彼らは、そのような者たちに対してどうすることもできませんでした。では、そのような敵たちに対して、どうしてイスラエルは勝利することができたのでしょうか。答えは一つしかありません。それはただ神様が彼らをお愛し、助けを与えてくださったからでした。ただ神様のゆえに、彼らは敵に勝利することができたのです。

そして、彼らはそんな恵み深く、力強い神様の過去の働きを知っていたからこそ、神様への強い確信を今も抱いていました。そんな力あるみわざを、すでに成し遂げるのでできた神様が、今も変わらずに助けを与えてくださると信頼していたのです。ですから続く4-7節に、「:4 神よ。あなたこそ私の王です。ヤコブの勝利を命じてください。:5 あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。:6 私は私の弓にたよりません。私の剣も私を救いません。:7 しかしあなたは、敵から私たちを救い、私たちを憎む者らをおはるかきめなさいました。」とあります。彼らはここで、神様

に対して「あなたこそ私の王です」と口にしていました。言い換えれば、彼らは「自分が王です」と、高ぶっていたのではないのです。彼らは神様が自分たちの王であることを認めていました。そして、自分たちは、へりくだってそのしもべであるということを知っていたのです。そして、しもべであるからこそ、彼らはただ神様の力に拠り頼もうとしました。自分の力や強さが勝利をもたらすのではないことを知っていたからこそ、ただ勝利をもたらすことのできる神様の助けを求めて、その方に信頼していたのです。

これは私たちも同じです。私たちも過去になされた神様のみわざをいつも覚えることができます。私たちが苦しみの中に置かれる時、私たち自身もあわれみ深い神様がこれまでどのようにして恵みを示し続けてくださったのかに心を留めることができます。自分の弱さを認めて神様の助けに拠り頼むこともできます。自分には到底できないことさえ簡単に成し遂げることができる偉大な力ある神様に、私たちは信頼してゆだねることができます。そして、神様がかつてどのように働かれたのかということを知覚する時に、私たちはただこの方に感謝することができます。私ではありません、振り返った時に、神様、あなたがすべてをなしてくださいました、あなたが私に必要な物を与えてくださいました、あなたが私を助けてくださいましたと。私はそんなあなたをほめたたえますと。イスラエルの民はまさにそのように歩んでいました。だからこそ8節を見ると、それで締めくくられているのです。「:8 私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。」と。彼らは、神様が過去になされたみわざに思いをめぐらせて、そして、変わらない神様の働きに期待しながら、困難な中でも信頼し続けようとしていました。神様を誇りとして、神様の御名をとこしえにほめたたえようとしていました。どのような時も神様の姿に目を留めて、感謝を持って歩み続けようとしていたのです。それが、民がとっていた一つの行動でした。過去のみわざを思い起こしていたのです。

さて、ここまでだけを見ると、この詩篇の内容はただただすばらしいものを感じるでしょう。すばらしい働きをなしてくださる神様に、信頼して歩いていく信仰者の姿を見て取れるからこそ、神様に信頼していく者、神様に忠実に歩いていく者を、神様は続けて祝福して下さり、大いに用いて、恵みを与え続けてくださるのですねと思われました。しかし、この詩篇はそうではありませんでした。ここから、詩篇は大きく一変することになります。人々は理解することのできないひどい苦しみを味わうことになるのです。

## 2. 今、置かれた状況で心を留め続けること 9-22節

そして、そんな苦痛の中で、彼らがとった二つ目の行動を見て取ることができます。それは、今置かれた状況で心を留め続けることでした。彼らは、ただ過去に目を向けて、過去に神様が何をなされたかということを知覚していただけではなく、今、目を向けるべきところがどこなのかを知覚していました。どういうことなのか、少し流れを見ながら考えてみましょう。8-10節にこんなふうが続いていきます。「:8 私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。:9 それなのに、あなたは私たちを拒み、卑しめました。あなたはもはや、私たちの軍勢とともに出陣なさいません。:10 あなたは私たちを敵から退かせ、私たちを憎む者らは思うままにかすめ奪いました。」と。この時点で、人々が抱いていた混乱を見て取ることができるでしょう。イスラエルの民たちは、自分たちの神様が、かつて自分たちとともに戦いに出て、そして勝利をもたらして下さるお方であるということを知覚した先祖たちからも聞いていました。そのことを知覚していたのです。彼らはそのことを知覚していたからこそ、自分に拠り頼もうとするのではなく、変わらずに神様に信頼して、そして神様をほめたたえながら歩いて行こうとしていたのです。けれども、突然、同じ神様が自分たちのことを拒み、戦いに一緒に出てくれなくなったのです。「私たちの軍勢とともに出陣なさいません」と。そしてあろうことか、勝利をもたらしてくれるのではなく、なぜか敵たち、自分たちを憎む者たちが好き勝手にし、それによって民たちは大きく傷つき、大きな敗北をも味わうことになったのです。「私たちを憎む者らは思うままにかす

め奪い」ますと書いていました。間違いなく彼らはうろたえていたでしょう。神様、どうしてでしょうか、私たちは変わらずにあなたのことを愛しています。あなたのことをほめたたえようとしています。それなのに、どうしてこのようなひどいことが、私たちの身に起こるのでしょうかと。

その混乱がさらに深まっていきます。続く11-12節は、比喩的な表現を用いて記されていました。「:11 あなたは私たちを食用の羊のようにし、国々の中に私たちを散らされました。:12 あなたはご自分の民を安値で売り、その代価で何の得もなさいませんでした。」と。本来であれば、イスラエルの民たちにとって、神様はいつも自分たちとともにいて、世話をしてくれる羊飼いでした。神様こそ、ご自分の民をどんな時も愛してくださるお方ははずでした。かつてはその愛のゆえに、エジプトのパロの手からもイスラエルの民を救い出してくださり、贖い出してくださっていたのです。申命記7:7-8にも「:7 主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。:8 しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」と書いています。かつて、神様はその愛のゆえに、人々を贖い出しておられました。そのことを彼らは知っていたでしょう。それなのに、その同じ神様が、今は羊である者の世話をしてくれないばかりか、まるで殺されるために引き渡される食用の羊かのように扱っておられたのです。イスラエルの民たちは、敵の好き勝手に扱われていました。神様は、ご自身にとっても何の益にもならないはずなのに、ご自分の民たちを、ご自分に信頼する者たちを敵に売り払い、彼らははずかしめを受けていたのです。彼らの混乱はますます深まったでしょう。

そして、これに加えて13-16節を見ると、「:13 あなたは私たちを、隣人のそしりとし、回りの者のあざけりとし、笑いぐさとされます。:14 あなたは私たちを国々の中で物笑いの種とし、民の中で笑い者とされるのです。:15 私の前には、一日中、はずかしめがあつて、私の顔の恥が私をおおってしまいました。:16 それはそしる者とのしる者の声のため、敵と復讐者のためでした。」とあります。8節と9-16節を比べると大きく変わりました。イスラエルの民たちはひどい状況に置かれていました。かつてはご自分の民をあざけるような敵たちに対して、ともに立ち向かってくださっていた神様が、身を引いて遠く離れていたのです。人々の間で笑い者にされ、はずかしめを受けるそんな苦難の中で、何よりも神様の助けが必要なのに、その神様が全く何もしてくださらないのです。間違いなくイスラエルの民はひどい混乱を覚えたでしょう。何が起きているのか理解できなかったでしょう。神様どうしてですか、あなたに逆らっていません、あなたに忠実に歩んでいたのに、なぜ私たちと一緒にいてくださらないのでしょうか、いつもあなたのことを慕い求めていたのに、どうしてそんな私たちを拒み、一日中はずかしめを受けることをよしとされるのですかと。

少し考えてみてください。ご存じのとおり、イスラエルの民たちも決して完璧だったわけではありません。いろいろな場面で罪を犯すことはありました。イスラエルの民たちは弱さをたびたび覚えて、神様に逆らうことも多くありました。私たちはイスラエルの民にそんな印象を持っているかもしれませんが、彼らはいつも失敗していたと。少なくとも今私たちが見ているこの詩篇においては、彼らは神様の前に忠実に信頼して歩もうとしていました。神様を捨てて、別の何かを求めようとしていたのではなく、神様を愛して、この方のすばらしいみわざをほめたたえようとしていました。でも、そうして忠実に歩もうとしている自分たちがひどい敗北を味わい、敵たちに好き勝手にされ、大きな悲しみや苦しみを味わっていたのです。本来であれば、どんな時も必要な助けや力を持っておられる神様に頼ることができるはずなのに、なぜか神様が沈黙して何の応答もしてくださらないのです。自分たちがどうしてこんな状況に置かれているのか全くわかりませんと、イスラエルの民たちが不平不満を覚えたとしてもお

かしくなかったでしょう。それ以上に、従順に従い続けている者に対して、こんな理不尽にも思える苦しみを与える神様に、これ以上従い続けても仕方がないと思ってもおかしくなかったでしょう。

では、イスラエルの民たちは、こんな理解できない苦しみの中でどのようにふるまったのでしょうか？彼らがどんなことをしたか、17-18節に「:17 これらのことすべてが私たちに襲いました。しかし私たちはあなたを忘れませんでした。また、あなたの契約を無にしませんでした。:18 私たちの心はたじろがず、私たちの歩みはあなたの道からそれませんでした。」と書かれていました。民がなしていたことは、変わることなく神様の前を忠実に歩み続けることでした。たとえひどい困難に直面して、自分には何が起きているのか、いっさいわからなかったとしても、自分たちには到底理解できなかったとしても、今の状況において、イスラエルの民は神様に心を留め続けていたのです。もちろんこのような歩みが、彼らにとって簡単なものでなかったのは言うまでもありません。神様の道からそれることなく、従順でさえあれば、すべての苦しみが自動的になくなったのかというと、そうでもありません。むしろ置かれている状況が厳しいことには変わりはありませんでした。実際、苦しんでいた民たちには、大きな痛みと苦しみが隣り合わせのままでした。死の危険までもが迫っていました。19節からの続きを見ても、「:19 しかも、あなたはジャッカルに住む所で私たちを砕き、死の陰で私たちをおおわれたのです。:20 もし、私たちが私たちの神の名を忘れ、ほかの神に私たちの手を差し伸ばしたなら、:21 神はこれを探り出されませんか。神は心の秘密を知っておられるからです。:22 だが、あなたのために、私たちは一日中、殺されています。私たちは、ほふられる羊とみなされています。」と書いています。イスラエルの民が抱えていた苦痛は深刻でした。彼らが抱えていた葛藤は、非常に大きなものでした。彼らはかつて神様が、先祖たちを何度も助けられたことを確かに聞いていたのです。彼らは神様だけが、どんな状況も変えることができる力と知恵を持っておられると何度もいろいろな人たちから聞き続けていたのです。自分たちも目にしていました。そして、そんな神様の前に自分たちも忠実に歩み続けようとしていたにも関わらず、自分たちが必要とする助けは全くやって来ないし、自分たちが必要としている神様の恵みを見ることもなかったのです。彼らは、どんなに大きな痛みを持っていたでしょう。だから彼らは22節の最後に、「私たちは、ほふられる羊とみなされています。」と言っています。無力で、なすすべもない羊のように、彼らは感じていたのです。間違いなく、彼らが置かれていた状況は最悪なものでした。けれども、そんな状況にあっても、彼らは変わることなく、神様から離れて行こうとはしませんでした。理解できない苦しみに心を奪われて、神様への疑いや怒りを覚えることはありませんでした。民たちは、今、置かれた苦痛の中で、いったいどこに自分たちの唯一の助け、力があるかを忘れてはいなかったのです。

予期せぬ困難が私たちに降りかかって来るとしたら、果たして私たちはどのように応答するでしょうか？変わらずに神様に信頼して、その道を歩み続けようとするのでしょうか？それともその瞬間に神様の姿を忘れてしまって、神様がかつてどのようなすばらしいことをなし続けてこられたのかも忘れ、神様が今もなお変わらず、すべてに必要な助けを与えるお方であることを忘れて、自分勝手な道へと進んで行こうとするのでしょうか？みことばはとても大切なことを教えてくれました。それは、神様の前をたとえ正しく忠実に歩もうとする者でも、時に理解できないほどの大きな痛みを受けることはあるということです。私たちが神様に忠実であり続けようとする、そこにはさまざまな苦しみも存在しているということです。かつてのイスラエルの民たちも同じでした。ヨブも同じでした。そのような苦しみの中に置かれた時こそ、私たちも彼らと同じように、今置かれた状況で、どこに助けがあるのかを覚えて、目を向けるべきところに目を向け続ける必要があるのです。変わることをない神様に、どんな時も心を留め続けることが私たちにはできますし、それが大切だということです。

### 3. 将来の助けを祈り求めること 23-26節

そして最後、苦しみの中で民がとっていた三つ目行動は、将来の助けを祈り求めることでした。23節は「:23 起きてください。主よ。なぜ眠っておられるのですか。目をさましてください。いつまでも拒まない

てください。」と始まっていました。ここで文字どおり神様が眠っておられたという話をしているのはありません。嵐が一向に去らないからこそ、理解できないその苦しみがいつまでも終わらないからこそ、人々は神様がまるで眠っているかのように感じていたのです。だからこそ彼らは「起きてください」と強く訴えていました。これは心地の良い朝に、トントンと肩をたたいて起こされるような優しい感じではありません。「主よ。なぜ眠っておられるのですか。目をさましてください」というその訴えは、まさに彼らの心からの叫びでした。まるで実際に嵐を経験する中で、船で眠っていたイエス様を起こそうとしていた弟子たちのようです。弟子たちは、どういうふうによにイエス様を起こそうとしていましたか？マルコ4：38に「：38 ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われぬのですか。」と書いていました。これと同じように、イスラエルの人たちも切実に求めていました。苦しみの中で、ずっと沈黙を保っておられる神様が、今すぐにでも行動を起こしてくださるようにと必死に求めていたのです。そして、そんな切迫した祈りの中で、彼らはこんなことを願っていました。最後、こうまとめられています。「：24 なぜ御顔をお隠しになるのですか。私たちの悩みとしいたげをお忘れになるのですか。：25 私たちのたましいはちりに伏し、私たちの腹は地にへばりついてあります。：26 立ち上がって私たちをお助けください。あなたの恵みのために私たちを贖い出してください。」と。民が願っていたことはシンプルでした。昔も変わらずに、偉大な力を持っておられるお方、恵み深い存在である神様が、今の理解できない状況から自分たちを贖い出してくださるようにと願っていたのです。

そして、最後まで彼らは疑うことがなかったのです。かつて先祖たちにあわれみを示され、人には到底できないことを成し遂げてこられた神様が、自分たちにも同じようにあわれみと恵みを示してくださることを、苦しみのただ中で求め続けていたのです。確かに今の状況は、ほふられる羊のように感じてはいました。神様が自分たちを見捨ててしまったかのようにも感じていました。大きな悲しみや痛みも覚えてもいました。しかし、それでもなお彼らは、いつまでも変わることはない神様の愛を確信していたからこそ、苦しみの中でなお神様に助けを祈り求めていたのです。神様の愛は、決して変わることがないと確信していました。そしてこれは私たちにとっても大きな励ましを与えてくれるものです。神様を信頼する者は、ただ過去のみわざにだけ心を留めるのではなく、苦しみの中であって働かれる今の神様の姿にだけ心を留めるのでもありません。私たちは過去も、今も、そしてこの先も、いつまでも変わることはない神様の恵みと愛に、どんな時も心を留め続けることができるのです。ある時は、私たちの目には、神様が遠く離れていて、沈黙しているように感じられたとしても、ある時は、忠実に歩もうとしている自分に答えてくださらないように感じたとしても、決して神様が変わらないお方であるからこそ、私たちはこの方の変わらない愛に信頼し続けることができると言うのです。

こうして詩篇44篇のイスラエルの人たちの姿を見てきましたが、それでも、私たちは自分の置かれた状況が余りにも苦しくて、神様の愛が本当に変わらないものなのか不安や恐れを抱くことがあるかもしれませぬ。その時には、一つのことばにいつも心を留めてみてください。ローマ8：35-39に、著者であるパウロはきょう学んだ詩篇44篇のことばを引用していました。「：35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。：36 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。：37 しかし、私たちは、私たちを愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。：38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、：39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と書いています。パウロは、実際にさまざまな苦しみに遭っていました。信仰のゆえに患難を経験し、迫害を受け、飢え渴きを覚え、多くの危険を味わっていました。文字どおり、ほふられる羊とみなされるような状態

にあったのです。しかし、そんな彼が、この地上におけるいかなる状況であろうとも、イエス・キリストにある神の愛から私たちを引き離すことはできません。たとえ私たちには理解できない最悪の苦しみに思えるものであったとしても、神様の愛から私たちを断ち切ることはできませんと言っていました。だからこそ、私たちは忘れてはいけないのです。神様は、私たちを見捨てることはないということです。忠実に歩もうとしているその中で、苦しんでいたとしても、神様の愛がなくなってしまうことはありません。神様の愛は変わらないものです。私たちはただ私たちを愛してくださった方によって、圧倒的な勝利者となることができると言われています。だとすれば、この変わらない神様の助けを私たちも祈り求め続けることです。この神様の変わらない愛に、私たちもいつも信頼し続けることです。

かつてスポルジョンもこんなことばを残していました。「この世の人は、豊かに与えてくださる間は神を賛美します。しかし、クリスチャンは打ちのめされる時でさえ神を誉め称えます。神が知恵に富んだ、決して間違えることのない存在であり、あまりに良いお方で、決して悪を為さらない存在であると信じているのです。それゆえ、自分が理解できない時も神を信頼し、最も苦しい時にも神を見上げ、全てが上手くいくと信じるのです。」と。果たして私たちは、こんなにもすばらしい神様をどんな時も信頼しているのでしょうか？どんな時も変わることのないこの神様を、変わらずにほめたたえているのでしょうか？この1週間もこの神様の愛とあわれみに拠り頼みながら、この方の栄光を現す者として、ともに歩んで行きましょう。